

## ホボ口島が生物浸食作用で消えて行く

沖村 雄二

沖村雄二氏（地質学、古生物学）は、「東広島市の自然誌」の刊行に向けて努力されています。一方で、長く東広島市を拠点に、自然研究会会長として、小中高生を含めて、市民とともに現地調査をされ、自然研究の啓蒙と普及の努力をされてきました。

今回、その活動の一環として、東広島市安芸津町赤碕の沖にある小さな島、ホボ口島の調査を市民と伴に行い、この島が生物侵食作用のために消失して行く実態を明らかにしました。

以下は、日本地質学会 News 10(6) 2007、に掲載された記事の引用です。なお写真は、同誌の表紙を飾ったものです。

「ホボ口島は、ここ数十年の間に見る見る小さくなった。大正時代には、長径が120mあった島が、現在は高潮位時には8m足らずである。会員の沖村雄二(元理学部)氏らの地質調査の結果、ホボ口島を構成しているデイサイト



溶結結晶凝灰岩が“ダンゴムシ”のような[ナナツバコツブムシ]による穿孔を受けて岩石が風化する[生物浸食]が原因であると報告している。」

(広島大学マスタース通信第7号より)